

永遠結び

shino

ゆるり山房

目次



3 Limit

(初出 2019.6 pixiv「リミット」を本誌用にリメイク)

12 特別な花

(初出 2019.6 pixiv)

15 旅結び

(書き下ろし 2019.10 制作)

26 あとがき

◎この本は個人的に作られた非公式ファンブックです。

◎原作者様・出版社様とは一切関係ありません。

◎オリジナルキャラ、死ネタ表現が一部ありますのでご注意ください。

Limit

そばに
いるだけで
十分だと思
っていた。

たまに抱
きしめて。

たまに唇
を重ねて。

でも、
もう限界
だった。

*

飛影と一ヶ月ほど口を聞いていない。

軀はふと唇を見てそう思った。

口を聞いていないだけではなく、姿も見えていない。一応百足にはいるみたいだが、打合せは欠席。軀の自室にも一度も来ておらず、かといってパトロールをサボっているわけでもなくどうやら軀だけ避けられているようだった。

今までもちよつとした事で喧嘩になり互いに口を利かなかった事はある。しかし今回のように百足にの顔に顔を合わせないという行動は初めてだ。

何がきっかけだったか……

そんなことをボンヤリ考えている軀だったが奇淋の呼びかけで我にかえる。

「軀様、本日の大統領府への会議ですが飛影が護衛役を辞退したいと申しています」

その発言に軀は思わず顔をしかめた。一日一回のパトロール前の打合せ。軀軍時代の側近を中心に十数名が会議室に集まり、ルートの確認や救助した人間の情報等を共有する場だ。こういった情報共有の場がしつかりしているのは三竦み時代の名残りでもある。

「なんだ、飛影のヤツは打合せを欠席しておいてそんなこと言ってきたのか？ 腹でも壊したか？」

「詳しい理由は自分も把握しておりません。私が代理で行くという事で宜しいでしょうか？」

しばらくの間。会議室の空気が張り詰めたタイミングで軀が口を開く。

「今回はオレひとりでもいい。お前たちはいつも通りの仕事をしてくれ。今日の打合せはこれで解散とする」

凜とした声が響くものの、その声にいつもの覇気がないことに元側近である者達は皆気づいていたのだった。

*

最後に部屋に来た日も普通に一言二言会話をして同じ寝台で眠りについた。

一緒の寝台に眠っているが、お互い眠るだけ。肌寒い日などは軀から飛影にくっついて寝たりしていたが、それは小動物がじゃれ合うものに近かった。

その日の飛影もいつもと変わらなかつたと思ふ。どちらかというと軀自身の方がその日はおかしかつたと今なら言える。

目の前で眠る飛影の背中を見ながら思ってしまったのだ。この当たり前になった関係はいつまで続くのかと。それ以上の事を求めてもいいのかが分からなかった。そういう行為は心底憎んでいたじゃないかと自分自身が一番混乱していた。

ただ、飛影とキスした後に残る高揚感には日に日に大きくなるばかりで。

後ろ向きの首筋にそっとキスをした。

それで満足して自分も眠るつもりだった。ところが、予想外にビクッと驚く反応があった。むくりと起き上がった飛影と目が合う。

「今のは何だ？」

いつもより低い声で聞かれた気がする。

「……ワリイ、寝ぼけていたみたいだ」

——違う。

「寝ぼけていただけか？」

紅い瞳が見つめてくる。

「ああ、起こして悪かったな。明日のバトロールは遠出し早く寝ないとな」

——違う違う。

「おやすみ、飛影」

くると飛影に背を向け掛布をかぶる。核の鼓動が聞こえてしまわないようにキツく掛布を握りしめた。

そして再び飛影が横になる気配を感じ、軀はホツとしたのだった。

結局拒んだのは自分なのだ。その結果、飛影が離れていったに過ぎない。

もし、あの時本心を伝えていたら今はどうなっていただろう？

お前はオレを抱いたか？

*

「あれ、今日は飛影いないの？」

大統領府に到着した軀に孤光がいつもの調子で話しかけてきた。ここに来る時は大抵飛影が一緒だからそう聞いてくるのも仕方がない。

「断られた。いよいよ飽きられたかな」

「まっさかー、だってこないだの酒宴だって凄い熱い視線おくってたわよ。ねえ」

肩をすくめ冗談っぽく言う軀に孤光はないないと明るく否定した。

「気になるなら本人に直接聞けば？ 百足にいるんでしょ」

「それが出来たら楽なんだが……」

棗が言うことはもつともだと軀も思う。そう、避ける理由を聞いてしまえばいいのだ。でも、もしその答えが軀自身が想像しているものだとしたら？ それを自分は受け容れることが出来るのだろうか。

ずっと前から覚悟はしていたはずなのに。その言葉をアイツから聞いたら……

「もう軀は難しく考えすぎなのよ。もつとバーンといけばいいのよ。聞きたい事を聞く！ 話さないなら拳で聞く!!」

声高らかにそう宣言する孤光に、思わず軀は吹きだした。

「クク、なんだそれは。初めて聞いたぜ？」

「我が家の夫婦円満秘訣よ。効果バツチりなんだから」

「孤光、軀に無茶言わないの」

「もう何よ、私は軀が心配なのよ！ そういえば棗、あなたの方は最近どうなの？」

「!?、今は私のことは関係ないでしょ！」

ワイワイと盛り上がり始める二人を見ながら軀も口許が緩む。

「オレも随分と焼きがまわったな」

「ぼそりと軀はつぶやいた。」

三棘みと呼ばれ恐れられていたのに随分としようも無い事で悩んでいたものだ。

力が全ての魔界。自分らしくやろうじゃないか。

*

パトロール任務から戻った飛影を待っていたのは時雨だった。だいぶゲッソリした表情で飛影を呼び止める。

「さっきから医務室に運び込まれてくる者が多すぎて敵わん。お主、さっさと闘技場についてケリをつけてこい」

「なんの話だ？」

「お主がここ数週間、軀様と距離をとっているのは承知している。だが、軀様が納得していないだろう？」

「……それと闘技場がなぜ関係する？」

「軀様が闘技場で暴れておられる。このままでは明日のパトロールにも支障がでる。百足内で軀様を止められる可能性があるのはお主くらいだ。元筆頭の責任としてどうにかしてこい。骨は拾ってやる」

そう言いたいことだけ言うとき雨は医務室の方へ去っていく。飛影は複雑な表情をすると舌打ちをし、闘技場へ向かった。

闘技場についた飛影が一番最初に見たものは妖怪の山だった。辛うじて生きているようだ。そしてその奥に軀の姿が見える。

「ん、やっときたか。手合わせしてやるぜ」

普段の手合わせの時より、少しギラギラした蒼い瞳。

声をかけようとした飛影に軀の容赦ない蹴りが飛んできた。それをかろうじてかわし、間合いをとる。

「避けられたか。間合いとるの上手くなったんじゃないのか？」

そう言うとき再び軀は攻撃を仕掛ける。次々とくる攻撃をギリギリのところでかわしながら飛影は思わず舌打ちをした。

「おい、話を聞け。突然何をしてるんだ？」

「話を聞けど？」

軀が攻撃の手を止め突然笑いだす。何がおかしいのか？飛影がそう思った次の瞬間、目と鼻の先に軀がいた。

「オレをずっと無視していたのはお前じゃないか」

低く小さく聞こえたその声はどこかもの淋しくて。蒼い瞳に飛影が映る。次の瞬間、ガードも間にあわず飛影に衝撃が襲う。

ドガアアーン。

盛大な破壊音が百足内に響きわたった。

*

ぐるぐると飛影の腹に包帯が巻かれる。軀に吹き飛ばされて百足の外まで吹っ飛んだ飛影だったが、追いかけてきた軀にすぐ拾われた。治療室は軀が闘った妖怪で満員御礼だった為、軀の自室にて応急処置をすることになる。まだ意識が覚醒しきっていない飛影はボンヤリと軀がする処置を見つめていた。

「なんでオレの事避けてたんだ？」

ボンリと軀は話します。

「別にさけていたつもりは……」

「もう一発穴あけるか？」

ニッコリと笑いながら恐ろしい事をいう目の前の女に飛影は観念したようでふーっと一息つき口を開いた。

「幽助の隣で笑ってるお前を見るのも悪くないと思った」

それはまったく予想していなかった発言で、ここ数週間悩みに悩んでいた軀の思考をさらに混乱させた。幽助？

笑う？ なんの話を目の前の男はしているのか？

「……オレなんかより幽助みたいな奴の方がいいんじゃないのかと思った」

そこまで聞いて思いたす。少し前にあった酒宴を。大統領府で行われた統一トーナメントの打上げ。見知った顔ぶればかりだった事もあり、軀も飛影もそれなりに楽しんでた。そして軀が孤光達と談笑していたところに酔っ払った幽助がやってきたのだ。すっかり出来上がっていた彼は孤光や棗に絡み、そのまま側にいた軀にも絡んだ。肩に腕を回された時はさすがに驚いたが、孤光や棗にもしていただき、何より軀に回してきた腕は孤光らにより早々に引き剥がされた。だからその出来事は軀にしてみたらそこまで印象に残っておらず、その後の幽助と孤光のやり取りの方が面白くて覚えてるくらいだった。でも目の前の男は違ったようだ。

「それで離れても平気か試してみたんだが……」

飛影の手がさわりと軀の頬に触れ、髪に触れる。軀はそんな飛影をただただ見ていて――

「無理だった」

そう言うとし強引に軀の顔を引き寄せ飛影は唇を重ねる。何度も何度も重なる唇に軀の表情も恍惚としてくる。

ようやく唇が解放されたと思えば、ひょいっと抱えられそのまま寝台に放り投げられるように運ばれた。軀がシーツの感触を味わう暇もなく低い声が耳元でする。

「他の奴に触らせたくない。覚悟しとけ」

「ん……」

紅と蒼の視線が交差し、満足げに軀は微笑んだ。

「上等だ」

再び重なる唇からは甘い吐息が漏れていた。

*

いつからだっただろう。触れるだけでは物足りないと思うようになっていたのは。

もっと触れたい。もっともっと。

でもそれと同時に思い出す。軀の過去を。

あの豚野郎と同じような事はしたくなかった。そもそもあの行為にどんな意味があるのか？

自分自身も忌み子。そういった行為の先に何があるのか正直分からなかった。

触れたいという自分の欲望のために軀を傷つける。それは決してしたくは無かった。

そんな時だった。あの出来事があったのは。

よく笑うようになった軀が幽助の側で笑っていた。

ああ、雪菜のように遠くから見守るだけでいいのかもしれない。

一度そう思ってしまった感情は次第に大きくなる。

迷っていた。

そしてあの夜、首筋に感じた感触にどれほど驚いたことか。

その一線を超えたらどうなる？ 傷つける？ また笑ってくれるか？

オレは軀の側から離れることを決めた。

とはいっても、突然百足から去ることは出来ず、顔だけ合わせないという子供じみた行動をとっていた。ふとした時に邪眼で様子をうかがう。正直反則だと思うが、そのうち平気になるはずだ。

そう思っていた矢先に、闘技場で暴れる軀と対面した。

邪眼越しではない軀に見惚れた。

倒れてる妖怪達の中でただひとりたたずむ姿に目が離せなかった。

そこからは一瞬の出来事だった。一方的な戦闘で吹き飛ばされ、あつという間に場外。

治療を受けながら軀に問いただされる。どこまで受け入れられるのか。再び吹き飛ばされるのか、即ミンチにされるのか……でも、あの目はもう見たくない。吹き飛ばされる直前にみた軀の顔。

オレが見たいのはそんな顔じゃなくて――

唇を交わし、愛撫し、気がつけばベットに軀を押し倒していた。

「ん、飛影……」

唇に、脛に、耳に。唇を落とす度に漏れる軀の吐息に未だかつてない程興奮していた。

服の下へと滑りこませた手から感じる体温が心地よく触れることがやめられない。

華奢なその身体にどれほどの力が秘められているのか。右半身の火傷痕も、機械の右腕も全てが愛おしくて。

「あつ……」

少し裏返った軀の声。恥ずかしそうにこちらを見上げてくる表情が堪らない。

甘い甘い口づけを。

誰にも触れさせない。

お前はオレのものだから。

＊

「もう少しあとさきのこと考えて行動しろよ……」

「お前が悪い」

「……確かにその腹の穴はオレがあげたけどよ」

ぐるぐると飛影の腹に新しい包帯を軀は巻いていた。

「違う。お前が笑うからだ……」

「は？ 言ってる意味が分からないぞ。相変わらず言葉足

らずな奴だな」

そう言うときゅーぎゅーと包帯を引っ張りワザと痛いく

らいきつく縛った。

「これでたぶん大丈夫だろ。つておい！」

言い終わるや否や軀は飛影に抱きしめられていた。

「離したくない」

「それはそれは。また傷開いてもしらないぜ？」

「……」

バツの悪い顔をする飛影を見て軀はクスリと笑う。

こてんと頭を飛影の肩に乗せれば、優しく髪を撫でられた。

心地よくて、もつともつと触れて欲しくて。

「実はオレも離れたくないんだが、どうすればいい？」

そんな軀の言葉を聞いて飛影が我慢出来る訳もなく。

二人は再び唇を重ねるのだった。

〈終〉

特別な花

白い花を花瓶に生ける。殺風景だった部屋が少しだけ暖かくなった様子に軀は思わず顔が緩んだ。

「ハッピーバースデー」

その言葉とともにもらう花束。もう何度貰ったのか曖昧になってきたけれど、その思い出は軀の記憶に刻まれている。

花は枯れていずれ無くなる。それでも貰うととても嬉しくなる。

「来年もくれるか？」

「お前は毎年それを言うな」

「そういう事言いながら花を贈るお前は優しい奴だと思っ
ぜ？」

クスクスと笑う軀の声が部屋に響く。面白くなさそうに
飛影は仏頂面になった。

「そんな怒るなよ。毎年お前から誕生日を祝われてオレは
幸せだぞ」

にこりと軀が微笑むと、仏頂面が今度は照れ顔へと変わっていく。そんな反応を見るのも軀の楽しみのひとつだ。

「今度あの鉢で何か育ててみようかと思ってな。お前だったら何にする？」

部屋の片隅にあるリボンのついた大きな鉢。それは初めて飛影から貰った誕生日プレゼントだ。鉢の中身はとうの昔に処分した。軀があまりにもあつさり処分したから飛影に驚かれたものだ。ただ、鉢はずっと空っぽのまま部屋の片隅に置いてあったのだ。

「食えるヤツか、薬草の類にしようかと思っているんだけどな。あ、毒草とかも面白いな」

「……毒草は止めて普通の花にしる。食べ物もダメだ。その鉢で出来たものを食べたいとは思わない」

「まあ、そうだな……」

暫しの沈黙。

そしてお互い目を合わせて思わず笑った。

気づけば二人の距離は縮まって、軀は飛影に捉えられるように抱きしめられていた。

「なんだよ、急に」

「触りたくなった」

ぎゅうと背中に回された手に力が入るのが軀に伝わる。あたたかい体温が心地よい。

耳元でかすかにまたあの言葉が聞こえた。

——ハッピーバースデー

今日は特別な一日。

〈終〉

続きは本編でお楽しみください